
マイ・ベスト・フレンド・キャンディ

ふらじゃいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイ・ベスト・フレンド・キャンディ

【Nコード】

N7958L

【作者名】

ふらじゃいる

【あらすじ】

惑星イロルは地球に良く似た星だが、決定的な違いがある。それは、そこに住む生き物たちを人間は食べられないということだ。ただひとつの例外が、キャンディと呼ばれる小動物が生み出す結晶体だけだった。その結晶体を作り出すことが、その星に住む人間の子供たちの最大の試練なのだった。大人になるために、生きるために、少年の選択の時が迫っていた……。

教室の窓を、キャンディが無邪気に叩いていた。遊んでほしいの
だろう。

マリー先生は中指で眼鏡を押し上げて、いつもの神経質そうな顔
をした。

「おわかりね、みなさん。私たちは、必要にかられて、キャンディ
を役使しているのです」

当のキャンディを無視して、マリー先生は歴史の授業を続ける。

本当は理科なのだが、マリー先生はよくこの手の脱線をするのだ。

「私たちが住む惑星イロルの諸生命は、我々人類とはまったく異なる
遺伝体系をもっています。特に気をつけなければならないのは、
多くの生物が私たちにとつて食用として受け付けられないものである
ということです。毒性はありませんが、私たちの消化酵素では分
解されません。また、私たちが母星から持ち込んだ植物もこの惑星
の土壌では育ちませんでした。つまり、この惑星への移民はかなり
難儀である、という結論がいち早く出されたのです」

中学校の理科じゃ、もちろん遺伝子の話なんてさわり程度しか習
わない。消化酵素がどうのなんて、さっぱりだ。でも、マリー先生
の話はなぜか、聞いていると面白い。

この前、恋愛について話していたマリー先生は面白かった。最近
彼氏と別れたらしく、自分を裏切った恋人の話をした後で、男は遺
伝学的にも浮気する生き物なのです、と鼻息を荒くしていた。

クラスの女子に泣きはじめる奴まで出て、ちよつとした騒ぎにな
った。校長先生にさんざんしぼられたみたいなのに、先生の脱線癖
は治らなかった。

「私たちがキャンディを見つけたこと、いいえ、彼らと出会ったこ
とは、まさに、遙か彼方の母星から星の海を越えて届いた、大い
なる主のお導きでした。愛すべき準知性生物であるキャンディは、

私たちが摂取不可能な生物たちを分解し、私たちに恩恵ある栄養分として再構成するという性質をもっていたのです」

そう話しながらマリー先生は窓際へ歩いていき、窓を開けて、教室を覗いているキャンディに挨拶した。

「ごめんなさいね、今はダメなの。お昼休みになったらみんなが遊んであげるでしょうから、それまでお待ちなさいね」

白い肌のキャンディは大きなまん丸の黒目をパチクリさせて、うんうんと肯いた。キャンディはよく理解していないとき、ごまかすようにこういうしぐさをする。

キャンディは窓の縁を可愛らしい小さな手でつかみ、頭を上げたり下げたりして、キャツキヤと笑った。

キャンディは人間の幼児のような体のバランスと大きさで、顔つきは、鼻こそないものの、二つの大きな目と口の位置は人間と同じだった。

頭髮はなく、頭の上には宝石のように綺麗な玉が乗っている。大きさはそれぞれはそれぞれのキャンディによって違うのだが、このキャンディは野球ボールぐらいの黄色い玉だ。

特徴的なのは耳で、まるで地球の蝶々の羽のような形をしている。人間の大人が目いっぱい広げた手ぐらいに大きい。この耳はときおり発光し、頭の上に乗せた宝石と同じ色に輝くのだった。

「だめよ」

マリー先生がキャンディの両手を優しくつかんで外に降ろすと、キャンディは悲しそうにきゅいきゅいと鳴いた。ようやくわかったらしい。校庭のほうへ走っていく。

「私たちは、この惑星にいる親友を大切にしなければなりません」窓を閉めて教壇へ戻りながら、マリー先生の声には、さっきキャンディにかけていた柔らかい声とは打って変わって、硬い緊張感が込められていった。

「愛さなくてはいけません」

マリー先生の話がこれからどう展開するか予測がついたので、僕

は少し憂鬱になった。

僕は授業が終わるまで耳を塞いで、外で仲間と遊んでいるキャンディたちを眺めていた。

帰宅一番、僕はいつものように勉強のことは後回しにして、図書室から借りてきた分厚い本を開き、ベッドに横たわった。

『我が友キャンディ』。マリー先生の推薦図書だった。

『序文』より抜粋

愛すべき我らが親友、キャンディ。

この本を手にとった諸兄には、この言葉だけ残ればいいと思う。

彼らは我々に多くのものを与えてくれる。対して我々が彼らに与えてやれるものは、実にささいなものでしかない。

彼らはほとんど我々に捕らえられ、利用されているというのに、笑顔を絶やさない。

彼らは何者にも敵対しない。信頼しつづけることが彼らの遺伝的性質であり、生存の術となっている。

愛を理解する知性があるというのに、他者を疑うということを知らない。それは愚かなことだろうか。いいや、気高いものである。

愛すべき我らが親友、キャンディ。

人間の誰も、彼らのようにはなれない。

二年半前、中学へ上がったとき、僕のところへキャンディが送られてきた。

誰もがこの時期から、キャンディの世話をすることを義務付けられている。

キャンディを立派に育てられてはじめて、一人前の大人と認めら

れる。それによって与えられるライセンスが僕に許可する数々の権利はどれもこれも、本当に魅力的なものばかりだ。

学術都市への居住権、Cレベルのネットアクセス権、地球への航行パスポート発行、エアカーの免許取得権、などなど。

これで大人になれる。僕はドキドキした。

睡眠ケースの扉を開くと、頭の上に玉が乗っていないキャンディが体を起こした。

大きな目を開いたキャンディに、僕は緊張ぎみに挨拶した。

「お、おはよう。……はじめまして、キャンディ。僕は、ケイタ」
大きなまん丸の黒目をぱちくりさせて、キャンディは僕の顔の形を確認するようになでまわした。

「きゃい」

キャンディが満面の笑みを見せると、頭の上に針のようなものが突き出て、輝きはじめた。光の糸が何本も針から飛び出してきて、それはみるみる黄緑の綺麗な玉を形どり、固まった。

僕を友達だと認めてくれたのだ。信頼すべきものだ。

振り返ると、お父さんとお母さんが、嬉しそうに笑顔でうなずいてくれた。

僕も嬉しかった。

これで大人になれるんだ。

『二章・キャンディの生態1・食物について』より抜粋

キャンディは惑星イロルの大半を占める半炭素生物であり、その構造は地球生命とは比較にならないほど複雑かつ珍妙である。

惑星イロルの生命は他生物を食すように進化はしていない。むしろ、食されないように進化している。

彼らを分解吸収しうるものは、二万年ほど前まではバクテリア以外になかった。このバクテリアは多様な種があるが、POPと総称

されている。

これによりこの惑星の生命の動きは一樣に鈍重で、多くは植物のようなものであった。

バクテリアPOPを体内に取り込むことに成功したキャンディ系種の登場はまさに、惑星イロルの全生物にとって青天の霹靂であつただろう。

キャンディは人類の耳に当たる器官に高度なエネルギー交換細胞を有している。この大きな耳は水と二酸化炭素、そして太陽光によって生命活動に十分なエネルギーを生み出す。これは地球植物の光合成とは似て非なる反応様式である。 P 1 1 8・1 2 行参照

また、他の多くの生物のように地中の二酸化珪素を食することによって各種身体器官を形成している。

だがキャンディは他に、さまざまな生物を経口摂取する。これは、キャンディの頭上に乗っている象徴的な宝石を形成するためである。これは多糖系球体神経網と呼ばれる。

人類の惑星イロル入植以前、キャンディの頭上の多糖系球体神経網は、主に特定の状況下で、不要となった知識を捨て去るために使われていたと推測される。

部分的に炭化珪素で形成された頭蓋の強固な防壁によって嚴重に守られているキャンディの脳の最中心に、人間でいうところの脳幹がある。そこから頭の上にまで伸縮する針のようなものが、神秘的な光彩神経である。

この針によってキャンディの頭上に形作られる綺麗な宝石は、擬似多糖類の重合体で作られた、キャンディの脳でのみ解読可能な高度な情報集積体となっている。

ここには生命活動に不要な知識、つまり呼吸や筋肉運動、循環系の制御など、生命維持に関わるもの以外の情報が収められている。

例えば、思い出などがそれにあたるだろう。

法律で、キャンディには名前をつけてはいけないことになっている。

キャンディたちは愛すべき親友たちだが、一人のキャンディを愛しすぎてはいけなからだ。

でも、僕は名前をつけていた。違法じゃない。なぜなら、僕がつけた名前は『キャンディ』。種族名じゃない。僕がつけた、僕だけの名前だ。たまたま同じ音が、こいつの種族名なだけさ。そう思えば、特別なものに思えてくるから。

僕の家を訪れたキャンディはすぐに、家族のようになった。僕は一人っ子だったので、弟ができたみたいで嬉しかった。いや、見た目の可愛らしさや声の高さからして、妹だろうか。キャンディには性別がないらしい。生まれてすぐに、なくなるそうだ。

「キータ、キータ」

ケイタだ。ケイタだよ。何度言ったらわかる。この……、可愛い奴め。

キャンディは勉強中の僕をよく邪魔した。フォログラムの格闘ゲームが好きで、最初は僕の連戦連勝だったのに、すぐに要領をつかんで、勝てなくなった。

「きやつきゃ」

キャンディが笑ったび、蝶の羽のような耳が黄緑に輝く。そして注意深く頭の上の宝石を見れば、ほんの少しだけ大きくなったのがわかる。

キャンディの笑顔と綺麗な宝石の輝きは僕の心を穏かにする。ゲームで打ち負かされても、いつだって後味は悪くなかった。

こいつの綺麗な宝石が立派に成長したとき、僕は大人になるんだ。

『四章・キャンディの至宝』より抜粋

親愛なるキャンディ。我々は彼らの起こした奇跡に感謝する。

キャンディの頭の上の美しい宝玉は、我々の合成食品にとってなくてはならない原材料である。

多糖系球体神経網と呼ばれるキャンディの至宝は、そのままでは非消化性である。また、名前からこの球体を多糖類だと勘違いする人が少なくないが、これはまったく異なる。この球体を厳密に定義しえる言葉は、我々の辞書には存在しなかったのだ。

キャンディの宝石は超低下下での水と二酸化炭素との段階的な化学反応を経て、元の体積の数千倍のタンパク質、炭水化物、脂肪、ビタミン、ミネラルといった、人間にとってのあらゆる栄養素と化すことが可能である。

この合成手法を可能にしたキャンディの至宝の生成過程については未だ明かされていない。その魔術的な化学組成は、まさに奇跡の産物である。

この謎が解き明かされれば、銀河地球星系にキャンディの名は大きく轟き、その名声は半永久的なものになるだろう。

そして何より、我々の悲しみもなくなるのだ。

キャンディが我が家に訪れてから二年が過ぎた、夏休みだった。僕は課題の植物収集をかねて、家族と山へキャンプへ行った。もちろん、キャンディも一緒だ。

僕とキャンディはテントの設営をお父さんに押し付けて、森を散策しにいった。

惑星イロルには危険な野生生物などいない。不用意に草花を口に入れたりしなければ、安全な森だ。

「はぐはぐ、はぐはぐ」

キャンディは手当たり次第に草花や昆虫を食べていた。キャンディは僕らと違って、ほとんどのものを口にしてかまわないのだ。土だつて食べられるぐらいなんだから。

キャンディがキノコのような形をしたものを僕に差し出した。笑

顔で、あげる、と言っている。

食べると言っているのだろうか。それとも、綺麗な色をしているから、花を贈るようなつもりでいるのだろうか。とにかく僕は、ありがとう、と言って苦笑いした。

キャンディは、きやは、と笑ってから、今度は大きな木に登りはじめた。巻きついていっているツタを伝って素早く高い枝まで辿り着くと、
「ひゃーい、ひゃーい」

と楽しそうに声を鳴らして手を振る。

「すげー！」

とても真似できない。体が軽いとはいえ、抜群の運動神経である。褒められたのが嬉しかったのか、キャンディはさらに高いところへ登っていく。

僕は少し不安になりながらその様子を眺めた。もう下りてこい、と言ったが、聞こえないようだ。

落ちたらどうしよう。僕はだんだん怖くなりながら、ずんずん登っていくキャンディが視界の外へいかなないように手の平を目の上にかかげ、大木からゆっくりと後退した。

落ちたのは僕だった。

「うわあっ！」

植物たちに囲まれて暗いのもあって、まったく気がつかなかった。大きな草の葉に隠れて、僕の足元に崖が迫っていたのだ。

反射的に周りの植物や岩壁をつかもうとしたが落下の勢いで上手くいかず、僕は絶叫を上げながら滑り落ち、小さく突き出た岩に尻を叩きつけたところでようやく止まった。

安堵よりも先に、めちゃくちゃに痛い尻で頭がいつぱいになった。骨が折れたかもしれない。だが、そう思ったのも束の間、先に折れたのは、僕を支えていた岩のほうだった。

瞬時に押し寄せた恐怖は尻の痛みをふっ飛ばし、足元から頭までを電撃のようにしびれさせた。

僕は岩に爪を立てた。無理だ。落ちる。そう思ったとき、太いツ

ルが流れ落ちてきた。無我夢中でそれをつかむ。助かった。

「きゅーっ！ きゅーっ！」

頭の上で高い声を上げていたのは、他ならぬキャンディだった。僕にツルを投げてよこしてくれたのだ。

キャンディは小さな手に懸命に力を入れて、今まで見たこともないような必死の形相をしていた。

無理もない。自身の四倍はある体重の僕と、太いツルの重みを引っ張っているのだ。

「キャン！」

キャンディの体が倒れたように見えた。上半身が僕のほうへ引き寄せられている。ずる、ずる、とツルが下がってくる。僕は下を見た。崖下までは、学校の屋上からよりも高い。

「キャンディ……」

僕の声は情けないほど震えていた。

ふいに、雨粒のようなものが顔に当たった。僕は青い筋が白いツルを伝ってくるのに気づいた。キャンディの血だ。硬いツルを握っているキャンディの小さな手は、もう限界なのだ。

このままではキャンディも落ちてしまう。

「キャンディ！ どこかへ巻きつける！ お前まで落っこちるぞ！」
言ってみてわかった。そんな力はもうキャンディには残っていない。

僕がこの手を、放すしか……

「キイイイイイッ！」

キャンディは僕に向かってこれまで聞いたこともないような大きく高い声で叫び、左右に首を振った。

「お前……」

聞いたことがある。キャンディには人の心を読む力があるって。キャンディは無理やりとも思える笑顔を作って、うんうんとうなずいた。

か弱いキャンディの手は血で真っ青に染まっている。もう肩だっ

て限界のはずだ。

「放せ！ もうやめろ！」

僕からは放せなかった。キャンディは笑顔こそ消えたものの、僕に向かつてうなずきつづけている。

僕は忘れていた。こいつは僕らと違って大バカなんだ。よくわかっていないとき、キャンディはこうするのだ。

「ごめん、キャンディ……」

「キイイイイイイッ！」

キャンディの大絶叫と共に、僕が手を放しかけたツルがぐいと引っ張られた。

「大丈夫か！」

キャンディの高い大声を聞いて駆けつけてくれた男の人は、誰だか知らないオジサンだった。

『最終章・キャンディをどう思うべきか』より抜粋

もしも君がキャンディをはじめて育てている少年少女だったら、きつと深刻な経験をすることになるだろう。

だがそれはけっして悲惨な思い出とはならない。いや、そうしてはいけないのだ。

君たちはキャンディと共に大人になる。だから、悲しまないでほしい。

山奥の星空の下、僕はお父さんと肩を並べて焚き火にあたっていた。

キャンディは疲れ果ててテントで眠っている。静かな夜だった。「どうしてずっと一緒にいちゃダメなの？」

わかっているのに、僕はお父さんに訊くんだ。

お父さんは星空を見上げてゆつくりと間を置いてから、僕に顔を向けた。

「みんな、平等にそうしているんだ。そうしなくてはいけない」
わかってる。

誰かがそうしてくれたから、今、僕と家族は生きている。

今日食べたバーベキューだって、キャンディの魔法の宝石からできているんだ。

僕だけが手を汚さないわけにはいけない。

そうだ、僕は、大人になるんだ。

『四章・キャンディの至宝』より抜粋

キャンディは信頼できる他者と出会ったとき、頭の上に宝石を形作る。キャンディはこの者を信頼しつつ、けっして裏切ることはない。

頭上の宝石は高度な記憶媒体である。キャンディはここに生命維持とは関係のない情報を集積させる。ゆえにキャンディはあらゆる経験をしていくにしたがって頭の上の宝玉を肥大化させていく。

これは一定容量を超えると成長が止まる。それ以後にキャンディが得た情報は優先度の低いものから上書きされるか、情報がより洗練されるということが推測されている。

キャンディが宝玉を完成させるのは、地球年にして二年半前後である。

基本的に簡単には外れないものだが、キャンディの宝石を無理やり取り去ることは、その脳神経に多大な損傷を起こすきっかけとなる。

もつとも容易にその宝石を外す方法は、キャンディの信頼を裏切ることである。

キャンディが宝石を生み出すきっかけとなった者がキャンディの

心から離れるとき、同時に宝石が頭から離れる。

そしてキャンディは裏切られたことを忘れ、記憶を白紙にし、再び宝玉を形成する。

どうやら本を読んだまま眠ってしまったらしい。

昔の思い出を夢で見たような気がする。

もう朝の九時を過ぎているが、日曜日だから気にすることはない。憂鬱だし、部屋の外へは行きたくなかった。

朝からゲームをやっているキャンディは無視だ。日曜日だからめいっぱい遊んでくれるだろうと思ってるんだろうが、残念だったな。もう遊べなくなるんだよ。

この間の日曜日、遊園地行っただろ。あれが最後だったんだ。

そう、今日だ。

……僕が大人になる日だ。

「きゃいきゃいっ」

楽しそうだな。二年半で、お前にはもうどのゲームでもかなわなくなっただよ。

キャンディはベッドに飛び乗り、僕を引きずり出そうとした。

「やめろよ。気分じゃない」

僕を引っ張る二つの手のひら。すっかり治った傷跡がある。

「お前に助けられたときの夢を見たよ」

「きゅ？」

キャンディは大きな黒い目をパチクリさせて、笑顔になり、うんうんとうなずいた。

わかってるよ。お前がよくわかってないってことは。いや。

キャンディは涙を流していた。どうしてだろう？

「お前……」

そっぴいえば、心が読めるって迷信があったっけ。

お母さんとケンカしたとき、お父さんに怒られたとき、友達ともめたとき、失恋したとき、何だかやる気がなかったとき、何にもわかってないはずのお前が、ただそばで笑顔でうなずいてくれたな。あれってけっこうなごむんだぜ。今もしてくれてるけどな。

「ケイター！ 下りてきなさい！ 局員さんがいらっしやっただわよ！」

行きたくないよ。気分じゃない。

そんな目で笑うなよ。うなずくなよ。ほんととはわかってないくせに。

どうしてなんだろうな。大人になりたいのに。

僕らは、何かを犠牲にしなけりゃ生きていけない。地球じゃ、生き物を殺して食うんだぜ。それに比べりゃ、たいしたことじゃないだろう。

どうしてこんなに嫌なんだろう。大人になりたくないんだろう。

悲しいよ。世の中は悲しい。どうして生きなきゃいけないんだ。

大切な友達を、なくしてまで。

キャンディ、お前は命懸けで僕を助けてくれた。

なのに。

さっきまでしつこく叫んでいたお母さんの声は、もう聞こえなくなった。

僕に任されたのだ。だから、僕は出ていった。

外の道に停められたエアカーは、キャンディの移送専用のものだった。

後ろは両開きの頑丈なドアで、これに入ったらいかに見た目以上の力持ちで身軽なキャンディといえど、抜け出すことはできない。

「きやつきゃ」

キャンディは楽しげだった。デパートにでも出かけるんだろうと思っているのかもしれない。でも僕の浮かない表情を見ては、目をパチクリさせている。

背広姿の局員さんが後ろのドアを開けた。僕は崖に落っこちたと

きのように急激な恐怖を覚えた。

すいません、明日にしてくれませんか？ そんな冗談みたいな言葉が出かかる。

局長さんはキャンディを導きもしなかった。僕の役目なのだ。試練だ。

僕はキャンディの小さな肩をつかみ、普段は恥ずかしくて家の中でだっつけたことないのに、キャンディを抱きしめた。

「きゅ」

ブービークッションみたいに、キャンディがか弱い声を漏らす。

「大好きだよ」

こんな恥ずかしいことは言わない奴のはずなのに。ちくしょう。キャンディとずっと一緒にいたいと思うこの気持ちは、キャンディのためなのか。それとも、自分のためなのか。

大人になんかなりたくない。でも。

僕はキャンディの背中を優しく押して、エアカーに乗せた。

僕らは……、僕は、生きなきゃいけない。

キャンディはぎゃあぎゃあ泣き出した。わかってるんだろう。生きるためには――。

僕は扉を閉めた。キャンディのわめき声が聞こえなくなる。

頭を扉にぶつけて、耳を押しつける。何にも聞こえない。

振り返ると、お父さんとお母さんが家の前で、渋い顔で微笑んでいた。

僕がどんな顔をしているかは、想像したくない。

さよなら。

ありがとう。

最高の親友、キャンディ。

（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
よかったです感想いただけるとすごく嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7958/>

マイ・ベスト・フレンド・キャンディ

2010年10月8日14時48分発行